

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の取組と特徴 —YU-AP 推進室の活動報告を兼ねて—

山口大学では、2014年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」の採択を契機として、ALポイント認定制度の導入によるシラバスでのALポイントの明示、アクティブ・ラーニング教室整備、クリッカーやiPad等のICT機器を活用したAL型授業実践普及、さらには、ALをテーマとしたワークショップ型FD・SD研修の拡充など、学内におけるアクティブ・ラーニングに関する環境整備が加速度的に進んだ。学修成果可視化の取組では、2015年度採択の国立大学機能強化経費（特別経費）を受け、DP（ディプロマ・ポリシー）達成度を可視化する新しいカリキュラムシステム YU CoB CuS（Yamaguchi University Competency-Based Curricular System）の全学展開とポートフォリオ機能を備えた新修学支援システムの整備を行った。

また、本学の教育理念「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」や「共育（共にはぐくむ）」といった教育理念の共有とアイデンティティの涵養を目的とし、2013年度から実施する教職員・学生参画型の「共育ワークショップ」が、2015年度受審の認証評価で高く評価され、学習者中心の環境づくりに貢献した。2017年3月、山口大学主催で学生リーダーの祭典「学生FDサミット2017春」を開催し、全国から258名の参加者を得て、学生の学びのあり方について成果発信した。

これらの成果が認められ、2017年度の間評評価では「S評価」という最高の評価を受けたほか、大学教育だけでなく、高等学校教育への波及効果を加速し、高大接続・社会接続を意識した取組を加速している。本稿では、

山口大学 YU-AP 推進室の活動報告を兼ねながら、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の取組と特徴について紹介したい。

1 背景と契機

本学では、2012年度の中央教育審議会・質的転換答申が提示した「学生の主体的な学びを促進するためのアクティブ・ラーニングや学修成果アセスメントの組織的取組」に対応するように、2013年度に共通教育改革を断行しアクティブ・ラーニング（AL）の組織的取組の先鞭として、課題探究型科目「山口と世界」を1年次必修科目として設定し、併せて、学習者の視点を取り入れようとするワークショップ「共育ワークショップ」の企画実施を行った。また、従来型の内部質保証システムを一層充実するため、「教育改善重視システム」「教員主体型FD（Faculty Development）」から「学修成果可視化システム」「教員・職員・学生参画型FD・SD（Staff Development）」に転換する取組を開始した。

学内での教育改革の機運と連動する形で、2014年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」に採択された。文部科学省・大学教育加速プログラム採択を契機として、ALポイント認定制度の導入によるシラバスでのALポイントの明示、アクティブ・ラーニング教室整備、クリッカーやiPad等のICT機器を活用したAL型授業実践普及、さらには、ALをテーマとしたワークショップ型FD・SD研修の拡充など、学内におけるアクティブ・ラーニングに関する環境整備が加速

度的に進んだ。学修成果可視化の取組では、2015年度採択の国立大学機能強化経費(特別経費)を受け、DP(ディプロマ・ポリシー)達成度を可視化する新しいカリキュラムシステム YU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) の全学展開とポートフォリオ機能を備えた新修学支援システムの整備を行った。

また、本学の教育理念「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」や「共育(共にはぐくむ)」といった教育理念の共有とアイデンティティの涵養を目的とし、2013年度から実施する教職員・学生参画型の「共育ワークショップ」が、2015年度受審の認証評価で高く評価され、学習者中心の環境づくりに貢献した。2017年3月、山口大学主催で学生リーダーの祭典「学生FDサミット2017春」を開催し、全国から258名の参加者を得て、学生の学びのあり方について成果発信した。

2014年度採択の文部科学省「大学教育再生加速プログラム(AP)」をエンジンとして広がる「アクティブ・ラーニング」「学修成果可視化」「学習者中心」といった大学教育改革のコンセプトは、2015年度採択の文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」でのフィールド学習や課題解決

型インターンシップを取り入れた地域志向教育プログラム改革や文部科学省・教育関係共同利用拠点「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点(知的財産教育)」での反転授業を取り入れた全学的知財教育改革などと連動した波及効果を生み、本学の総合的な大学教育改革を加速している。

2 山口大学 AP 事業の各取組

山口大学 AP 事業(YU-AP 事業)では、正課教育と正課外教育の共創により、アクティブ・ラーニング(AL)を共通教育から学部専門教育に拡充しながら組織的に推進し、次の時代を切り拓く人材として必要な力「山口大学生に期待される汎用的能力」の育成を保証するため、先導的な学修成果可視化モデルの構築を行い、学生の「学びの好循環」の創出を目指している。「学びの好循環」とは、図1に示すとおり、学習者中心の観点に立ち、学生の学びに焦点を当て、アクティブ・ラーニングの効果により、授業外学修時間の増加、学修成果の可視化を図り、学修履歴を集積するポートフォリオに基づき、適切なラーニングアドバイス、キャリアカウンセリングなどの学修支援を受けられるよう措置し、学生のさらなる成長を保証することである。

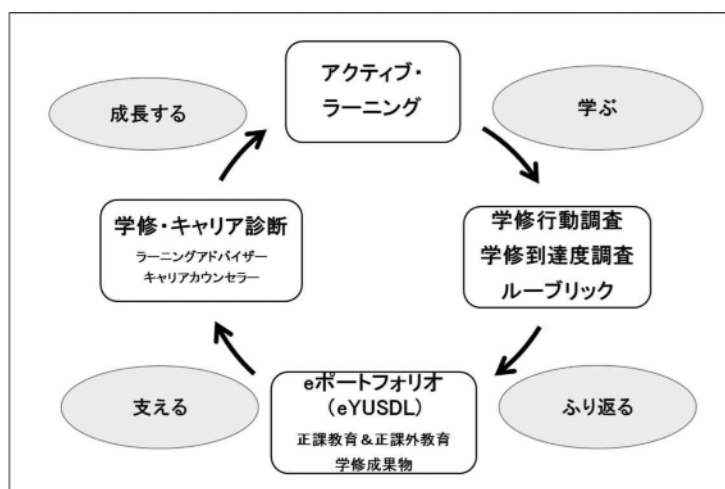


図1 「学びの好循環」の概念図

2.1 テーマ I（アクティブ・ラーニング）の取組

2.1.1 学士課程教育全体へのアクティブ・ラーニングの普及

テーマ I（アクティブ・ラーニング）では、①シラバスにおける学修行動の可視化を通じた AL ポイント認定制度の共通教育・専門教育を含めた全学導入、②AL 推進チームによる FD 専門集団（FD コーディネータ）の形成を通じた教育実践への貢献、③教員にインセンティブを与える AL ベストティーチャー表彰制度の制度設計・実施を着実に進めている。更に、アクティブ・ラーニングの手法の体系化を行いながら、具体的な教育実践を蓄積し、一般教員が活用できる環境の充実に取り組んでいる。また、アクティブ・ラーニングの教育的効果を検証することが重要であり、AL ポイントと学生授業評価との相関分析等を進めたほか、大学教育学会課題研究「アクティブ・ラーニングの効果検証」（2015～2017 年度）（代表：京都大学 溝上慎一教授（当時））に参画し、AL 型科目の効果測定に取り組んだ。2015 年度から AL ポイント認定制度を導入し、アクティブ・ラーニングの可視化やその詳細の把握を進めた。

共通教育科目では AL ポイントのシラバスへの入力率が 2016 年度には 83.1%（前年度比約 7%増）と高い水準となり、共通教育科目の大半で AL ポイントがシラバスに明示されている状況に至った。また、学部専門科目でも、2015 年度から 2016 年度にかけて、大半の学部で 10%以上の入力率上昇となった。学士課程教育全体では、2017 年度で 72.4%に達し、70.0%を超える状況にあり、AL ポイント認定制度が順調に全学展開した。YU-AP 事業を通して、より多くの教員がアクティブ・ラーニングに関わるようになった。

アクティブ・ラーニングの実施状況について、上記の AL ポイント認定制度のほか、2016 年度に「新しい共通教育の検証に関するアンケート」を教職員・学生対象に行い、教員によるアクティブ・ラーニング実践状況や学生におけるアクティブ・ラーニング型科目の満足度などを調査しているほか、学修行動調査を定期的実施し、学生の学修態度や学修成果を調査している。これらの各種調査を通して、事業の成果を把握し、改善・充実に活かしている。

アクティブ・ラーニングの授業実践が増加してくる中で、さらなる授業改善・充実に図る機会提供として、FD・SD ワークショップを各年度 3 回以上開催してきた。具体的には、大人数教室での AL 型授業の工夫、クリッカーや iPad などの ICT 機器を活用した AL 型授業の先進事例、PBL（Project-Based Learning）やサービスラーニングといった AL 型授業の設計や評価など、多種多様な形態をテーマにしたワークショップを提供し、教員によるより効果的かつ効率的なアクティブ・ラーニングの活用や学生の主体的な学びの促進に貢献している。なお、本 FD・SD ワークショップは学外に公開し、最近では高等学校教員や専門学校教員の参加が多数見られる。また、FD・SD ワークショップに参加した教職員・学生・ステークホルダー対象のアンケート調査を行い、ニーズの把握や事業の改善・充実に活かしている。

2.1.2 アクティブ・ラーニング授業実践のインセンティブ

アクティブ・ラーニングの授業実践に顕著な成果を上げた教員を評価し、表彰する「AL ベストティーチャー表彰制度」を 2015 年度に制定した。この表彰制度は本学教員の教育

へのさらなる意欲向上と、アクティブ・ラーニングの推進を目的に創設された。2016年度以降、AL ベストティーチャーの選定のため、前年度の授業実践の AL ポイントや、学生の授業評価アンケートにおける授業満足度・理解度・達成度、授業外学修時間、成績評価分

布などの指標をもとにした審査を行っている。これまで3年間にわたり、計15科目・38名の教員が受賞を受けた。なお、2018年度AL ベストティーチャー表彰の受賞者は表1のとおりである。

表1 2018年度AL ベストティーチャー受賞者一覧

区分	授業科目名	所属・職名	氏名
教養コア系列	キャリア教育	教育学部・教授	霜川 正幸
英語系列	英語会話Ⅱb	非常勤講師	GLASSIC BRIAN JEFFREY
一般教養系列	文化の継承と創造 1・2	大学教育機構・准教授	林 透
		非常勤講師	山浦 晴男
		創成科学研究科・准教授	鈴木 春菜
専門基礎系列 (理系基礎分野)	生物学実験	共同獣医学部・教授	佐藤 晃一
		共同獣医学部・教授	木村 透
		共同獣医学部・准教授	大濱 剛
		共同獣医学部・准教授	柳田 哲矢
		共同獣医学部・准教授	角川 博哉
		共同獣医学部・助教	日暮 泰男
		共同獣医学部・助教	三宅 在子
		共同獣医学部・助教	渡邊 健太
専門基礎系列 (日本語分野ほか)	日本語ⅣA(文法)	大学教育機構・教授	中溝 朋子

AL ベストティーチャーによる授業実践を幅広く紹介し、他の教員が活かせるような環境を整備するため、授業実践集『Teaching & Learning Catalog』を新たに発刊し、学内全教員に配布したほか、2017年9月には、AL ベストティーチャーによる模擬授業を体験するFD・SDワークショップを行い、好評を博した。このような取組は2018年以降も順調に行われ、「①AL ポイントのシラバス入力」⇒「②AL 型授業実践」⇒「③AL ベストティーチャー表彰」⇒「④AL 型授業のグットプラクティス普及(模擬授業型FD・SDワークショップ、授業実践集)」といったAL 推進の好

循環サイクルを確立している。

2.1.3 正課外教育プログラム開発と学生協働

YU-AP 事業では、学生参画による事業推進を行っており、大学教育センターの支援を得て活動する学生スタッフとともに「共育ワークショップ」等の企画・運営を行っている。学生と教職員の連携を強化するとともに、学生自身の学びの機会となっている。また、学生の参画を得ながら、新しい正課外教育プログラムであるスチューデント・リーダー・プログラム(SLP)の開発と実践が進んでいる。SLPは2014年度から実施し、これまで20回

以上開催した。2016年度からは、【ラーニング・スキル開発】【キャリア開発】【学生企画】の3つの枠組に区分し、実施している。いずれも多く多くの学生が参加し、高い評価を得ている。なお、SLPでは、正課外教育プログラムシラバスを学生に明示している。2016年度には、正課外教育プログラムに対する学生のニーズやプログラムの認知度を調査するため、「初年次学生の学習意識調査アンケート2016」を実施し、その結果に基づき、要望の高かった「ライティング入門講座」を2017年7月に実施し、70名の参加を得た。好評のため、2018年度も引き続き実施する定番メニューとなった。

2.2 テーマⅡ（学修成果の可視化）の取組

2.2.1 内部質保証システムと学修成果アセスメントの強化

テーマⅡ（学修成果の可視化）では、①学修到達度調査・学修行動調査の全学部1年次・3年次の実施、②ルーブリック開発・活用の推進とルーブリックハンドブックの刊行、③各データを活かした直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築を進めている。特に、汎用的能力の学修成果の可視化を重視し、教育理念に基づく「山口大学生に求められる汎用的能力」を明確化し、学修到達度調査による測定を可能としている。

学修到達度調査・学修行動調査の結果については、YU-AP事業推進委員会で概要説明し、各学部フィードバックするほか、1年次必修科目「知の広場」及び3年次必修科目「キャリア教育」において、学習到達度調査の結果を該当学生に解説し、さらなる学修に向けた動機づけを行っている。

本学では、従来から内部質保証システムを重視し、成績評価基準の平準化や厳格化を目

的として、成績分布共有システムを全教員に公開し、組織的な取組として行っているほか、AP事業において、新たにルーブリックの開発・活用を推進している。初年次教育のAL型科目「山口と世界」コモンルーブリックをはじめ、学部専門教育においてルーブリック開発・活用する事例が見られ、2016年度に実施した「新しい共通教育の検証に関するアンケート調査」では、15.1%（有効回答449名中68名）の教員が成績評価にルーブリックを活用している実態が明らかとなり、文科省調査（大学における教育内容等の改革状況調査（2014年度））におけるルーブリック普及率8.4%と比較して高い水準にある。

このほか、全学部において、教育課程の体系化に関する取組として、3つのポリシー策定のほか、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・フローチャートを策定し、学生に明示している。

2.2.2 新修学支援システム導入と学修成果可視化

本学では、2016年度に修学支援システムを改訂し、新修学支援システム eYUSDL (electronic system of Yamaguchi University Self-Directed Learning) を導入した。eYUSDLでは、学生の自己主導型の学修を支援する機能が新たに追加された。一つは、教員がシラバスを入力する際に、「ルーブリック等の評価基準」に関する資料をアップロードする機能が追加され、当該授業で期待される学修成果を参照した学修が促進されることが期待されている。もう一つは、eポートフォリオにおいて、GPAやTOEICのスコアの表示に加え、学修到達度調査や学修行動調査による学修成果や学修プロセスを多面的に捉える調査結果をレーダーチャートや一覧によっ

て表示する機能が追加され、学生本人や指導教員が到達度を把握できるようになった。このことにより、学生が自己スコアと全学や学部の平均スコアとの比較、1年次と3年次の自己スコアの比較を行うことが可能となり、自らの学修成果を確認し、その後の学修計画に活用することが期待されている。

3 山口大学 AP 事業の成果と波及効果

YU-AP 事業の成果のうち、他大学等に波及効果を与えた取組として、「①AL ポイント認定制度を通じたアクティブ・ラーニングの組織的推進」「②コモンルーブリック開発」「③学生協働を活かした事業推進」の三つが挙げられる。

「①AL ポイント認定制度を通じたアクティブ・ラーニングの組織的推進」では、①シラバスにおける学修行動の可視化を通じた AL ポイント認定制度の共通教育・学部専門教育を含めた全学導入、②AL 推進チームによる FD 専門集団 (FD コーディネータ) の形成を通じた教育実践への貢献、③教員にインセンティブを与える AL ベストティーチャー表彰制度の制度設計・実施という循環システムを整備している点が優れており、特に、シラバス上において各授業科目におけるアクティブ・ラーニングの度合を可視化した AL ポイント認定制度の導入は先駆的であった。他の AP 採択校をはじめ多くの高等教育機関の参考となり、同様の仕組みを導入する事例が拡充していった。また、アクティブ・ラーニングの教育的効果を検証することが重要課題となっているが、AL ポイントと学生授業評価との相関分析等を進める視点など、その後、学協会で進められている「アクティブ・ラーニングの効果検証」に影響を与えた。

「②コモンルーブリック開発」では、AP 事

業採択期と前後して、2013 年度に導入された課題探究型初年次教育の AL 型科目「山口と世界」のコモンルーブリックを 10 数名の授業担当教員で 1 年間をかけて作成し、授業実践や成績評価に活かす取組を行い、当該取組で得られた知見をルーブリックハンドブックとしてまとめた。2013～2014 年度当時において、アクティブ・ラーニングによるパフォーマンス評価のツールとして推奨されたルーブリックの組織的活用の実践事例が少ない状況において、先駆的取組として、多くの機関の参考となった。

「③学生協働を活かした事業推進」では、AP 事業採択以前から取り組んでいた学生参画型 FD 活動をさらに発展させ、AP 事業における学生スタッフを配置し、学生の声を活かした教育改善・学習支援充実に着手し、他機関の参考となった。2012 年度の中央教育審議会・質的転換答申を通して、大学教育におけるアクティブ・ラーニングの必要性が示されて以降、各大学でアクティブ・ラーニング導入の取組が進んだ。大学教育におけるアクティブ・ラーニングが与えた大きな影響の一つとして、Teaching 重視から Learning 重視への価値転換を通じた学習者中心の考え方が広がったことが挙げられる。学習者中心の考え方の広がりには、各大学において学生協働を取り入れた教育・学修改善 (学生参画型 FD, SCOT (Students Consulting on Teaching), ピアサポートなど) を導入・充実する結果に結びついた。特に、AP 採択校では、学生協働による教育改善や事業運営の取組が共通的に見られるようになった。

以上のような先駆的モデルの取組の波及において、AP アドバイザーとして委嘱した研究者 (国内 4 名, 国外 1 名) による専門的なアドバイスが大きな推進力となった。京都大

学松下佳代教授，同志社大学 山田礼子教授からは，2013～2015 年度にかけて実施した大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」プロジェクトにおいて，「山口と世界」コモンルーブリックの開発・運用，直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築に向けた指導助言を得た。その成果として，大学教育学会，関西大学との共催研究会等で事例発表した。また，富山大学 橋本勝教授からは，学生協働による AP 事業推進に関する指導助言を受け，本学の取組は AP 採択校で共通のテーマとなった学生協働の取組の先駆けとなった。その成果として，2015 年度全国大学教育センター等協議会，教育ネットワーク中国 FD・SD セミナーで招待講演したほか，学生スタッフによる横浜国立大学主催イベント（AP 推進フォーラム）での話題提供，追手門大学主催イベント（学生 FD サミット 2015 夏）でのプレゼン優秀賞受賞，日本大学主催イベント（学生 FD サミット 2016 春）での分科会企画，2017 年 3 月の山口大学主催・学生 FD サミット実施，さらには法政大学主催イベント（学生 FD サミット 2018 春）でのポスター大賞受賞に結実した。このほか，外国人アドバイザーであるメアリ・ディーン・ソルチネッリ氏（米国：元 POD 会長）からは，海外の高等教育事情を踏まえた指導助言を受け，本学の AP 事業の推進に寄与している。

さらに，2017 年度からは，アクティブ・ラーニング型授業やルーブリック活用による学修評価をテーマに，高等学校との情報交流や連携に大きな進展が見られ，2018 年 3 月に開催した AP 事業成果交流会「共育ワークショップ 2018」を高等学校と連携する形で成功に納めたほか，山口県内高等学校からの教員研修講師依頼や山口県立下関西高等学校のス

ーパーサイエンスハイスクール（SSH）採択に貢献している。

4 必須指標及び独自指標の達成度

YU-AP 事業における必須指標及び本学の独自指標について，2014～2017 年度の実績，さらには，2017～2019 年度の目標値の抜粋を表 2 に掲げており，定量的な数値目標の達成状況について順調に推移している。特に，必須指標である「アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合」は最終目標値 70%に対して「72.4%」，同じく必須指標である「アクティブ・ラーニングを行う専任教員数」は最終目標値 68.4%に対して「83.0%」と，共通教育と専門教育の垣根を超えて，学士課程教育全体に広がり，2017 年度時点で最終目標値を既に上回っている。

2017 年度には，前年度に初めて表彰を行った AL ベストティーチャーの優れた授業実践について，AL 型授業実践集『Teaching & Learning Catalog』への記事掲載に留まらず，生（ライブ）の授業実践を体感してもらうことがより効果的と考え，模擬授業型 FD・SD ワークショップを初めて企画実施したところ，学内の若手教員から好評であった。このように，AL ベストティーチャーをエンジンとした AL 推進の好循環が順調に進展している。このような全学的な AL 推進に伴い，学生 1 人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間（1 週間当たり）が 2014 年度と比較して，2017 年度には「10.42 時間」と大幅に増加している。

また，ルーブリック開発について，2017 年度には，ルーブリック活用による学修評価をテーマにした FD・SD ワークショップを，本学の医学教育センターと連携して企画実施し，医学部医学科におけるルーブリック活用事例

表2 YU-AP 事業における必須指標及び独自指標の推移（抜粋版）

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度		2018年度	2019年度
	実績	実績	実績	目標	実績	目標	目標
【テーマⅠ】◆学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニングの実施							
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合【必須指標】	13.6%	52.1%	65.1%	65.0%	72.4%	68.0%	70.0%
学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数【必須指標】	2.4 科目	10.8 科目	13.5 科目	12 科目	15.5 科目	12 科目	13 科目
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間（1週間当たり）【必須指標】	1.69 時間	7.19 時間	9.10 時間	5.00 時間	10.42 時間	6.00 時間	6.00 時間
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数【必須指標】	35.8%	73.1%	76.2%	67.2%	83.0%	67.8%	68.4%
アクティブ・ラーニングにおける優秀な授業料を授けられるALベストティーチャー賞受賞数【独自指標】	0科目	0科目	5科目	4科目	5科目	5科目	5科目
【テーマⅡ】◆学修成果可視化モデル構築のための多角的取組の実施							
授業満足度アンケートにおける授業満足率【必須指標】	4.21	4.25	4.26	4.3	4.30	4.3	4.3
成績評価基準の平準化を目的としたルーブリック評価の導入実績数【独自指標】	9件	12件	17件	25件	28件	30件	30件
退学率【必須指標】	1.3%	1.1%	1.3%	2.0%	1.4%	2.0%	2.0%
ラーニングアドバイザー及び高度専門職（UEA）の配置【独自指標】	3人	3人	3人	4人	11人	5人	5人

紹介などを行った。本学では、2016年度以降、医学教育や地域フィールド学習において、ルーブリックを活用する実践事例が増加傾向にあるほか、2017年度には、スタディ・スキルに関するルーブリックを新たに3種類（ライティングスキル、プレゼンテーションスキル、情報探索スキル）開発した。このような状況から、ルーブリック活用の実績も伸びている。

さらに、AL推進及び教学マネジメント強化に関するFD・SD研修について、全学研修会のほか、各学部主催FD・SD研修を積極的に行い、年間計27回、1,376名の参加者を数えた。2017年度における新たな取組として、2017年12月に、従来のSDセミナーに代えて新たに「大学マネジメントセミナー」を企画し、100名を超える参加者を得て、教職協

働における諸課題について議論を行い、大学マネジメント人材の専門性向上のための知識や能力について共有する機会となった。また、2017年11月～2018年1月にかけて、「ラーニングアドバイザー養成講座」を新たに開講し、計23名の大学事務職員が受講し、学生の「学びの好循環」に貢献できる学修支援者としてのスキルや態度を学び、全3回の講座を受講・修了した8名には「ラーニングアドバイザー認定証」が授与された。この実績により、ラーニングアドバイザーの配置数が大幅に伸びた。この取組は、2018年度には、山口大学だけでなく、大学リーグやまぐち加盟機関を対象を広げ、内容の充実を図っている。

以上のとおり、本事業が目指しているアクティブ・ラーニングの組織的推進、それに伴う学生の授業外学修時間の増加、さらには、学修成果可視化や教職員が一体となった資質向上の取組が順調に進んでいると言える。

5 まとめと考察

本学では、既述のとおり、「汎用的能力をアセスメントする学修到達度調査」や「DP達成度をアセスメントするYU CoB CuS」などの学修成果アセスメントに関する取組を進めており、図2のとおり、学士課程教育における質保証の概念図を整理している。2016年度には、学修支援システムを改訂し、自己主導型学修総合電子システム(eYUSDL)を導入し、YU-AP事業で進める学修到達度調査結果やYU CoB CuSによるDP達成度をレーダーチャートにより可視化する仕組を整備した。

今後は、可視化された学修成果を学生が自らの学修に活かしていくのか、教員が自らの学修指導に活かしていくのかが問われている。入口(入学)から出口(卒業)までの質の伴った大学教育を実現する視点から、学生の学修プロセスを重視し、学修ポートフォリオの充実や各種学修データを活用したIR分析等を実質化し、FD・SD研修会等で情報共有を図っていく必要がある。

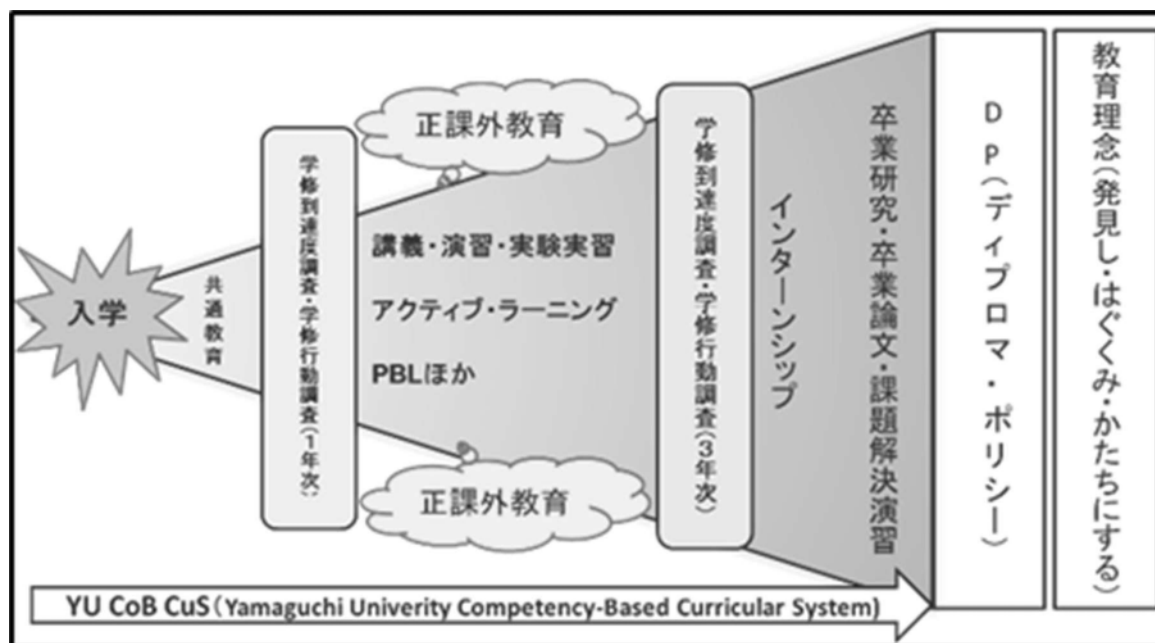


図2 山口大学・学士課程教育における質保証の概念図

以上のとおり、YU-AP 事業のテーマ I・II 複合型の取組を中核に、アクティブ・ラーニングの組織的推進と学修成果アセスメントの充実に努め、学生・教職員が学び合うラーニング・コミュニティを醸成しながら、本学の学士課程教育の質保証を図る総合的な大学教育改革を更に推進する。併せて、高大接続改革推進事業の趣旨に則り、山口県内の高等学校との連携を中心に、YU-AP 事業の成果を高等教育と学校教育の垣根を超えて共有し、教育機関の使命として社会に貢献できるように一層尽力するものである。

【参考文献】

- 山口大学 YU-AP 推進室, 2015, 『山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) アニュアルレポート 2014』
- 山口大学 YU-AP 推進室, 2016, 『山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) アニュアルレポート 2015』
- 山口大学 YU-AP 推進室, 2017, 『山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) アニュアルレポート 2016』
- 山口大学 YU-AP 推進室, 2018, 『山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) アニュアルレポート 2017』
- 山口大学 YU-AP 推進室, 2015, 『YU-AP News Vol.1 (ニュースレター)』
- 山口大学 YU-AP 推進室, 2016, 『YU-AP News Vol.2 (ニュースレター)』
- 山口大学 YU-AP 推進室, 2017, 『YU-AP News Vol.3 (ニュースレター)』
- 山口大学 YU-AP 推進室, 2018, 『YU-AP News Vol.4 (ニュースレター)』
- 山口大学 YU-AP 推進室, 2015, 『AL ポイント認定制度マニュアル (学生用・教員用)』

山口大学 YU-AP 推進室, 2016, 『ループブックハンドブック』

山口大学 YU-AP 推進室, 2017, 『Teaching & Learning Catalog Vol.1』

山口大学 YU-AP 推進室, 2018, 『Teaching & Learning Catalog Vol.2』

本稿は、2018 年 11 月 24 日 (土) キャンパスプラザ京都で開催された『大学教育再生加速プログラムテーマ I 及びテーマ I・II 複合型共同開催シンポジウム』(徳島大学・京都光華女子短期大学部主催) における発表抄録集に掲載した内容について、主催大学側の許可を得て、加筆修正を行い、とりまとめたものである。

文責：大学教育センター 准教授 林 透